

慈善事業期・感化救済事業期から社会事業期への発展の研究

岡山孤児院音楽幻燈（活動写真）会の発起者等と濟世顧問・濟世委員の一致者にみる連続性

○ 九州保健福祉大学 松原 浩一郎（会員番号 02890）

菅田 理一（鳥取短期大学 03416）、菊池 義昭（淑徳大学長谷川仏教文化研究所 00095）

〔キーワード〕 慈善事業期から社会事業期へ、岡山孤児院音楽幻燈（活動写真）会、濟世顧問・濟世委員

1. 研究目的

明治中期以降、資本主義経済の進展によって生成される社会問題や生活問題の変化に対して、慈善事業が勃興し、感化救済事業期を経て社会事業へと拡充していく。この慈善事業から社会事業への展開過程を、鳥瞰的解明・分析する先行研究は多い。本報告は、この時期の経過を、政策や制度の体系を俯瞰する方法をとらず、事業を担った実践者とその当事者に焦点をあてることで、先の各時期の経過に伴う進展の基底にある共通性や連続性を見出すものにある。

2. 研究の視点および方法

報告者らの共同研究の視点は、慈善事業期に石井十次によって創設・運営された岡山孤児院と同じ岡山県で社会事業成立期に創設された濟世顧問制度および濟世委員制度の研究成果の融合にある。具体的には、まず岡山孤児院の関係者と濟世顧問（以下顧問と記す）や濟世委員（以下委員と記す）の一致者を特定する。その上で、慈善事業から社会事業へと歴史の歯車を動かした動的要因を、これら個人レベル及び市町村レベルの実践から分析して、各時期区分の内実を立証する方法をとる。

本報告の具体的な方法は、次のとおりである。岡山孤児院の関係者の特定については、同院が事業展開した「音楽幻燈会」活動に焦点をあてる。この活動は、青年院児が音楽幻燈隊を組織して全国各地を巡回し（職員同道）、演奏や幻燈画等を上映し、参観者等から寄付金を募集し、運営費に充てることを目的としたものである。それと同時に、参観者に慈善事業の実践内容を啓蒙するものでもあった。なお上映した幻燈画は、創業時代の施設、院児の食事や就寝など生活の紹介（養育部）、幼稚遊園、小学校、運動場などの教育施設紹介（教育部）、活版印刷と製本事業や理髪店、裁縫場などの職業教育施設紹介（実業部）などであった。また、全国（海外も含む）の有志が賛助員となり、多くの金品寄付により施設が維持されていることなども説明して、賛助員として継続的に施設の維持に参画してもらうように参観者を誘引した。一方受け入れる各地域では、首長や有力者・名望家などが発起者や賛成者となり、地域住民を勧誘して活動を支えた。言うまでもなく発起者らは、音楽幻燈会を楽しみに参加した一般住民とは異なり、孤児院の理解者であり、その社会的意義をある程度認識していた者であったとも言え、この取り組みをとおして、自身の「福祉思想」が形成され確立されて行ったのではないかと推測される。

一方濟世顧問制度は、1917年岡山県知事笠井信一が考案した防貧制度である。県内全市町村を対象に1名ずつ選任して（岡山市のみは小学校区に1名）、知事が囑託した。顧問は、貧困調査や生活改善活動などをとおして、地域改良をはかり、防貧善化網を県内全域に構

築する中心的役割が期待された。ただし、則闕主義をとったため嘱託は遅々として進まず、不在の町村が多数あった。翌年民衆が起した米騒動に適切に対応できなかったため、1921年全町村大字に1名を必置とする濟世委員制度が創設された。なお、顧問・委員の人選は首長や郡長や当該警察署長があたり、人格正しき者や当該地域において中流以上の者などと規定され、無給の名誉職・終身制で、地域の名望家や篤志家が選出されている。

本報告では、前者の『岡山孤児院新報』（1896年7月～1909年5月発行）に記載されている音楽幻燈会の発起人名・賛成者名（一部タイトルが異なるものもある）と、後者の『濟世顧問・濟世委員名簿』（県当該部署発行）とを照合して一致者を特定する。

3. 倫理的配慮

本報告は、「日本社会福祉学会研究倫理規程」「研究倫理規程にもとづく研究ガイドライン」を遵守して処理している。歴史研究であり、研究対象者はすべて故人で、調査対象年はすでに百年を越えている。また、本演題に関連して、筆頭報告者および共同研究者に開示すべきCOIはない。

4. 研究結果

濟世顧問・濟世委員名簿の初版（1923年）では、顧問は195人、委員は2,611人であった（その後、死亡や病気などで交替した者があるため、実数約5千人となる）。この中で、音楽幻燈会の発起人等に名前を連ねている人物との一致者は、260人（内顧問55人）であった。またこれらの人物が居住する市町村数は、78市町村であった。『岡山孤児院新報』で確認できる音楽幻燈隊の開催地区数は120箇所であった。（原則市町村単位で開催しているが、一部近隣町村合同開催や、大字など小範囲な開催単位もあった）。

5. 考察

1887年石井十次が孤児を引き取った慈善活動は、岡山孤児院へと拡充した慈善事業に発展して、音楽幻燈隊の活動をとおして金品寄付の支援ネットワークを国内外に構築していった。このシステムの維持・推進が、慈善事業の啓蒙活動にもなり、支援者の「福祉思想」形成・確立にも一翼を担ったと仮定するならば、のちに顧問や委員の嘱託を受けることになった260人へも影響を与えたはずである。さらに顧問・委員就任後の活動にも影響したのではなかろうか。この一致者の発見は、実践史研究にあらたな視点と可能性を示唆するものであり、岡山孤児院と顧問・委員の歴史的役割を連続的・統合的に明らかにすることができるものと想定される。この連続性や広がりや、点としての事業が、地域住民を巻き込んだネットワークを作りだし、それにかかわった個人が、やがて顧問・委員そして方面委員として公的制度を支える人物になっていったことを意味する。このように、慈善事業にかかわった個人が、その後の社会事業へと関わりを継続した事実を明らかにしたことが、本報告の成果といえる。今後は一致者の中から、特定の個人を取り上げて、その「人権意識」や「福祉思想」の形成と展開を分析し、実践内容への影響を検討していきたい。

（謝辞）本報告は、科学研究費助成事業・基盤研究(C)（課題番号19K02289）の助成を受けた研究の成果の一部である。